

## 比島ピナツボ山中に消えた基地防空隊

石川県 松原 武男

私は昭和三（一九二八）年、石川県榑崎村字宿で十人兄弟の三男として生まれ、昭和十八年三月尋常高等小学校高等科二年を卒業、特別年少兵を志願し、昭和十八年七月、第二期兵科として舞鶴海兵団に入団した。

昭和十八年三月、当時は、特年兵制度などあったことなどは知らず、募集はあったようだが一般の海軍志願兵のつもりで受験した。そして兵科が第六十三分隊、機関科は第六十四分隊であった。

教育は当時の中学卒業程度の学力をつけるということで、午前中の軍事学に続き、午後の普通学では代数、物理、幾何、英語などが大学教授も交えた先生方による授業があつた。

舞鶴での初年兵教育は昭和十九年五月に終え、続いて館山砲術学校に行き高角砲などの訓練、教

育を三カ月受け、卒業後舞鶴へ戻り、舞鶴の補充隊に配属となった。ここで潜水学校へ行くことが決められていたのであるが、第三南遣艦隊配属となり、出田勝重少尉指揮の下に、舞鶴海兵団において編成された。

舞鶴から横須賀に行き、慌ただしく武器・弾薬の受領を終え、横須賀軍港を昭和十九年十月二十四日に出港した。第三南遣隊の対空要員として比島クラーク基地に一二・七センチ高角砲の設営を急ぐのが任務であつた。

学生出身の隊長、召集の下士官、昭和十九年五月入団の初年兵が主力の六十人たらずの兵員と、一二・七センチ高角砲四門が我が隊に与えられた戦力であつた。

私は門司で上等水兵に進級、「和洋丸」という東洋汽船所属の約二千七百トンの汽船に砲なども積み込み出港、下関で船団が編成された。門司を出て陸軍兵士を満載していた「角丸」という輸送船が米潜水艦の攻撃を受けて、文字通り轟沈した。

「和洋丸」は新造船で船足も速く、単独で大牟田港に逃げ込んだ。大牟田には三日ほどいて、支那沿岸沿いに台湾、マニラへ向かって航行を開始した。

落日の太陽が「和洋丸」の甲板を真赤に染めて、今まさに東シナ海へ沈まんとしているなかを、輸送船団は、死の海と恐れられるバシー海峡を、比島目指した必死の航海を続けた。支那沿岸を航行するときは上空で対潜警戒飛行をしてくれた上海基地からの護衛機の姿も、バシー海峡へ入る時分にはこの護衛の飛行機はなく、小さな駆潜艇のみが護衛のため波間に見えかくれしている。心細い限りだ。出田隊、長谷川隊の外に、横須賀編成部隊を乗せ、三カ月分といわれる食糧と、武器、弾薬を満載して、第三南遣基地、比島マニラ湾へ向け船足を急がせていた。

二時間ごとに当直交替の対潜警戒配置のまま十一月三十日、無事マニラ入港。二十四日のマニラ大空襲の跡は、湾内いたるところに爆撃を受けた

船舶が残骸として横たわっており、入港できないほどであった。岸壁に寄りかかるように軽巡「木曾」が擱座して傾いている。同期の金子吉光、山田昭三、佐藤源吉上水等も不安気な表情で言葉もなく見守っている。「和洋丸」局気付、出田隊発信の各留守宅あての便を下関港に託した最初の便りが、ここにして思えば最後になるような不吉な予感がしてくる。

それからの我々は自分の衣囊を持って慌ただしく上陸、軍装備、高角砲など兵器は軍需部が荷下ろしてくれる。マニラでは市内の万歳橋近くのビルルの二階に一週間ほど滞在した。マニラ駅から一二・七センチ砲四門と共に無蓋貨車で、石炭の代用に焚く椰子の外皮の灰塵を浴びながらクラークのダウ駅に到着する。

駅周辺には敵・味方機の残骸が山のように積み上げられており、戦況のただならぬことを知り、隊員一同、身も心も決戦の場に来た事をひしひしと感じたのだった。休む間もなくマルコットに陣

地構築に取りかかった。

手も足も出ない我が地区に対して行われる連日の銃撃と爆撃。その間に行われる設営作業にも、「今に見ている」との執念だけで昼夜兼行の重作業に耐えたクラーク地区対空各部隊である。しかし、遅きに失した陣地構築も、隊長以下全員の寝る間も惜しむ努力により、立派な対空陣地として、高角砲四門は射撃準備を完了して昭和二十年の新年を迎えた。

元旦とはいえ、各隊の砲員は、連日の空襲に備えて、今までの訓練の成果を試さんものと砲側に待機している。我が二番砲の高木兵曹は操法、その他、幕舎内の作業すべてを我々特年兵に責任をもたせ、しっかりと信頼し、任せきりだ。陣地構築も終え、心ばかりの元旦を祝った。正月とはいえ甘薯まじりの主食と味噌汁くらいが祝い膳である。

昭和二十年一月四日、慌ただしい空襲の声に幕舎から走り出る。連日のコース通り南方向からク

ラーク基地に進入してくる敵機の編隊、高度七、八千メートルぐらいか。B24爆撃機の周辺に艦載機グラマンが飛び交っているのが太陽の光に反射して、キラキラと光って見える。

「対空戦闘配置につけ！」。初めての対空射撃に砲員の目が血走り、固いまでの緊張感を全身にみなぎらせて、それぞれの配置に飛びついてゆく。

「二番砲良し！」「各砲良し！」の力が強く飛び交い、矢つぎ早に発せられる指揮所からの号令、もうこれは日ごろの訓練ではない。初めて地上と空との実戦での対決する瞬間である。クラーク地区対空各隊の弾幕が空に開いて、敵編隊の後左右を取りまいて炸裂している。

敵機は、我が出田部隊が守備につくマルコット陣地上空に進路を向けて、編隊そのままの水平爆撃の態勢で進入してくる。今か今かと砲に取りついて指揮所からの号令を待つ。緊張の一瞬、「進入する敵の飛行機、各砲射てっ！」の号令。間髪をいれず「旋良し！」「俯良し！」との力強い声

が帰ってくる。

敵編隊の進路に向け、日ごろの訓練の成果を祈り、砲員一丸となった初弾が目もくらむ発射音を残して飛び出して行く。矢つぎ早やの装填・発射に茫然とする砲員を叱咤し、励ましながらの応戦。

「命中っ！ やったぞ」の声に我に帰ると、敵機の遠ざかる爆音のあと、関山上空に開いたパラシュートが二つ見える。激しい空襲のあとの空に純白の傘を広げ降下する敵搭乗員の姿が地上に近づいてくる。

初めての対空戦闘の成果に、出田隊長以下興奮の色かくしきれず、掩体からとび出して空中に乱舞する落下物を集めようと走り出すものも出る始末である。

降下後、逮捕された敵搭乗員の心境はいかばかりか、同情はもちろん、憐れみのゆとりさえない。敵しい戦況の真ただ中にいる我々であり、また、食うか食われるかの敵、味方の立場で開始された戦闘だった。

一月九日、リングエン方面に終日、艦砲射撃の音が聞こえ、敵上陸も間近に迫ったと、緊迫した情報が流れる。我が陣地も、設営幾日もたたずして、対戦車攻撃を戦うため掩体を取除き、水平射撃の準備をする。

午後、リングエンに米軍上陸の報あり、ダウ駅方面からの撤退部隊が一ノ谷、二ノ谷方面へと続々と移動してくる。一月も二十日を過ぎ、タルラック方面に落下する敵砲弾も熾烈を極め、上空に旋回する観測機も、先日までの友軍陣地上空を悠々と我がもの顔に、広い空に浮かんでいる。そして手に取るような間近に旋回を繰り返し、本隊に目標を指示、弾着を修正し、目標を見極めて砲撃をしている。

一月二十四日、我が出田部隊は、前線にある他部隊の転進完了まで、現陣地に留って掩護に当ることになる。砲は水平射撃の態勢にして、タウ駅方面の砲声と、押寄せる戦車群を待ち受ける。刻々と最後の瞬間が近づいて来る。

一月二十五日、マルコット陣地後方の整備科倉庫の陰に、軍用トラックのエンジン全開の状態で待機させ、砲側に束の間の休息を取る。周囲には各砲員のこわばった緊張の顔々が見える。傷病者はすでに一ノ谷陣地へ転進を完了し、最小限の砲員だけでの応戦だ。

「配置に着け！」「目標！ダウ駅方面より来襲する敵戦車！」伝令の声がかたましくとび込んでくる。見るまに砂塵の中を歩兵を供なつた米軍戦車群が横一線になって押し寄せてくる。はやる心を押えつつ、今か今かと隊長の号令を待つ。八百、五百、四百と後続の歩兵の顔も見分けられるほどに接近してくる。

その瞬間、待ちに待った「各砲打て！」の聲が各砲間に響き渡り、我が二番砲も狙い定めた敵戦車へ一二・七センチ砲弾をたたきつけるように打ち続ける。一二・七センチ砲の威力はすばらしく、やがて、摺座炎上する敵戦車数両を放棄して後退する敵兵の姿が砂塵の中に遠ざかって行く。

しかし「やった！」との喜びの声も束の間に、一たん後退した米軍は後方陣地より我が陣地に対し、狙い定めた迫撃砲の雨を降らせてきたのだった。やがて、その一弾が三番砲の近くで炸裂し、砲員に負傷者が出た様子だ。「四番故障、射撃不能」、引きつった声が聞える。

続いて一番砲故障の声もとぎれがちに聞こえ、ついに陣地の最後の瞬間がやってきたのだった。

「二番砲、発火装置埋設急げ」の隊長の声に急ぎ取り外した発火装置を、かねて用意された土中に埋めスを塗り込み、油紙に巻き、指定された土中に埋める。「総員後退！乗車急げ！」の聲が続き、我先にと整備科倉庫の裏にエンジン始動のまま待機していてくれたトラックに身体一つ飛び乗って、残存者を確認、急発進するトラックの荷台に力いっぱいしがみついた。

一ノ谷陣地までは十数分の距離だが、あせる心には、大変遠い道のりに思われる。先発隊の設営してくれた幕舎も、草や木の葉に擬装されていて、

各兵員の衣囊も整理されて、飛び込んできた我々を迎えてくれたのだった。

土の上に腰を降ろして、今日の激しかった攻撃と撤退の状況を振り返り、ただ一兵の損失もなく、良く後退できたものだ、と、天佑神助を喜ぶのだった。

一月二十六日、昨日までの我が陣地には、早、点々と灯がともり、優勢な敵のゆとりが、武器弾薬の豊かさと共に、友軍の上に覆いかぶさっているのだった。この状況では、明朝には一ノ木戸入口付近に敵戦車の来攻が予想され、我が出田部隊からも肉迫攻撃班の編成が伝えられる。

長以下六人の選抜にあたり、同期の長田栄次上水は、途中編入のため休養を取り、今後の攻撃に備えよとの隊長の意向なるも、途中編入だからまず第一番に出してくれと一步も譲らず、隊長も最後には長田上水の申し出を認め攻撃を許したのだった。そして薄暮の中で隊長の見送りを受け、一ノ木戸へ向け身を挺しての戦車攻撃に消えて行っ

た。一月二十六日、長田上水以下六人との最後の別れだった。

いまや制空権は完全に米軍のものとなり、手も足も出ないうちに戦況は日増しに悪化を極め、陸戦兵器のない防空隊の行方は食糧の欠乏と共に悲惨のどん底を極めつつあった。一ノ谷陣地撤退、二ノ谷、三ノ谷を経て四ノ谷より本丸陣地に向う。集積された物資の周辺には、陸海の兵士がざわめいていて、深谷、奥山方面へ移動する者、我々と共に本丸司令部陣地に向う者、種々雑多の兵種が通り過ぎていく。

我が出田隊は一ノ谷撤退後は本丸司令部勤務を命ぜられ、建武集団、塚田中將のもとに移動中なのである。

長田上水の出撃後は、練習兵同期は山田昭三上水のみとなった。長谷川隊には金子吉光、佐藤源吉がいて頑張っている。長谷川隊はダウ駅より南側地区に対空陣地を構築し、対空警戒中であつたが、一月初旬の米軍リングエン上陸、クラーク基

地突入後は、十六戦区本丸周辺の守備についているとの伝言がある。そして長谷川隊長は敵迫撃砲弾により壮烈な戦死をとげられたとの知らせを聞く。

昭和十九年十月、編成時からの同僚部隊であり、厳しい訓練の内に兵への思いやりを持って接せられた隊長の面影が、昨日のことに思い出される。

四ノ谷より十ノ谷方面に向う本道をそれて、本丸に通ずる道は、けもの道のような兵士一人がやっと通れる程度の曲りくねった細い道で、谷を縫い、峰を伝わるものだ。司令部洞窟より四ノ谷寄りの山裾の奥行十メートルぐらいの横穴が臨時の勤務のための駐屯場所だった。

洞窟の前を通る道は、山裾から山頂へ連なっていて、十四戦区、高千穂、天神山陣地方面から負傷後退する陸海の兵士が傷口から鮮血を流し、仮包帯にウジをはわせながら疲れきった表情で、深山にあると聞く野戦病院へと後退していく。屋島

丸山陣地方面から小銃音と軽機の射撃音が時折聞えて、苦境の中にいて良く善戦している我が守備隊の健闘が祈られるのだ。

二月二十五日、金子上水戦死の知らせあり、敵迫撃砲弾の直撃により名誉の戦死とのこと、平和を信じ、征戦を胸に秘め、十七歳の命を捧げて異国の土となった君を、心からうらやましく思われる。

三月十日、本丸陣地は奪取され、我々は夜陰にまぎれ、傷病兵と共に深山地区に脱出する。この間に山田少尉自決、古瀬衛生兵戦死と、身近に迫る危機感が食糧の欠乏と共に隊員の間を広がって行くのも止めようもない現実であった。

期待した三月十日の反攻も脱出に追われ、今日もまた、うつろのような身体を引きずって、一足一足あてもない転進が続けられている。

前方、丸山にも米軍の進攻の姿が見られ、今はすでに部隊としての形もなく、三々五々として無言の転進を続ける。山頂の小道には戦傷で倒れ、

飢餓で倒れた陸海の兵士の骸が連なり、惨澹たる地獄の様相、正に死の谷だった。

今日も死への放浪が続けられ、時々思い出したように機銃の発射音が聞える。しかし、残存十一人の出田隊には、すでになんの刺激も感じ得る余力も残ってはいないのだった。

悪臭と いえるに似たり 奥山の

谷にさまよう 姿あさまし

たどり来し ピナツボの道 すでになく

街道突破の 友も今なし

昭和二十年三月、四月ころになると米軍も積極的に攻撃してこなかった。時にはこちらの出方によって撃ってくる。もうほとんど食糧がなく、脱落するものはほとんど死んでいった。皆餓死であった。

たまたま一緒になった陸軍の兵たちに聞くと、米軍の放送機が投降を呼びかけているという。戦争をしているわけでもない、座っているわけにもいかんし、外に出て行くも戻るも一緒、じゃ、出

て行くかということでは歩き出す。サツマイモの畑があっても、葉はあるが芋はなかった。

すると、「おい、おい」と呼ぶ声がある。百メートルほど行くと陸軍の軍装をした兵が出てくる。この戦場では珍しく立派な軍装である、腰を上げたところに米軍のジープの兵がいて「そのまま来い」という。はだして裸だし逃げる気配を見せると「バタ、バタ」と撃ってくる。皆一緒に出て行った。先ほど日本兵と見えた兵士はフィリピンのゲリラだった。

ジープに乗れといわれても、弱っていて腰も上からず手も掛けられず、上ることもできない。

こうして米軍キャンプに行き、米兵などがパンや肉を食べているのを見つ、我々は、ほんの粥の食事で始まり徐々に一般食へと慣らされた。

とぼとぼ歩いていた戦場で、樹の下で何か被って寄り掛かっている。「こんなとこに寝とつても駄目じゃないか」とめくって見ると白骨になっていた。

いる。軍服は着ているけれども、見ると中身がない。ゲートルが巻いておいてある。

水筒を持って水くみに川に下り、溜りで水筒を沈めて水を入れる、そばにウジの湧いた死体があり、その水が沈めた水筒に吸い込まれる。その水がなければ生きられない。他人がどこで、どういう水であるかと、他人がくんできた水なら飲む。これ以上、語らなくても・・・と。

我々は、舞鶴海兵団に入団したときが満十四歳七カ月、復員して来たときが満十七歳、今で言えば高校生二年の暮れです。この青春時代にこのような戦闘を戦い、このような体験をしてきた。フイリピン、ニューギニア、そしてビルマ、もう三カ月でも終戦が早かったらなあと思う。だから、このような戦場を見て帰っても、二、三年は懇ろにお寺参りをしました。

#### 後日談

昭和二十二年、第二復員局からの連絡によると、「和洋丸」乗船者（出田隊、長谷川隊及び横須賀

編成の桂田隊ほか不詳）の比島方面の復員完了時の調査によると、復員者は出田隊一人、長谷川隊（高戸清作二曹）一人の計二人とのことにて、先づ「和洋丸」の横須賀出港からマニラ入港までの航路と日時、また乗船部隊名を知らせてほしいとのことにて、早速、報告しました。

引き続き第二信にて、知る限りの乗船者名を姓又は名前と共に、いつごろどこに生存または死亡かを知る範囲で知らせてほしいとの連絡あった。

我が出田隊も、五月初旬の時点で既に隊長の自決と同期の長田、金子、佐藤、山田上水を含め、村田、武部、高木各兵曹、田所、白井、萩原、坂、今井、谷口、越川、私の身辺にいた戦友の姿も既になく、生存者はわずか十一人を数えるのみだった。

そして、昭和二十五年五月上旬、ピナツボ山噴火の報道があり、戦時、ピナツボ山中放浪の悪夢が再びよみがえり、散って逝った戦友の無念さが、自然の変化となり、何かを訴えているように思わ

れてならない。私には、戦友よ安らかにお休みなさいと祈るしかすべがない。

私は、和歌を良く作る。戦場の和歌はもちろん、A4ノートいっぱい書いた歌集のなかの二作を文中に掲載している。

また、庭には入団した「舞鶴海兵団東兵舎」と名付けた約百㎡の「海軍資料館」があり、個人で収集した約二千点の貴重な軍装品などを収蔵している。

## 生きるものの証言

鹿兒島県 児玉 俊 夫

私は、昭和二（一九二七）年生まれ、昭和十八年に海軍に入り、普通科看護術練習生としての教育を終え、嬉野海軍病院、横浜船舶警戒部を経て、昭和二十年一月十日、神戸三菱造船所で艀装中の「ぱれんばん丸」に乗船する。同船には、約百八十人の船員等が乗り組み、シンガポールでガソリン、錫、生ゴムを積み「良栄丸」と共に出港、カムラン湾を出た三月四日、米軍潜水艦の攻撃により、ガソリンに引火して沈没、私は救助された二、三人の中の一人でした。

救助に当たった「第六十九号海防艦」には京都府の鶴原甫さんが乗艦していた。

海軍軍人への道

- 一 軍人は忠節を尽くすを本分とすへし
- 一 軍人は礼儀を正しくすへし